

同志社大学所蔵「源氏物語色紙」の紹介

— 翻刻・現代語訳・解説 —

本学所蔵の「源氏物語色紙」は源氏物語五四帖のうち、第二九帖（行幸の巻）から第五一帖（浮舟の巻）までの二三帖が現存する。一帖につき詞書と絵が一枚ずつあり、いずれも縦三〇・一×横四九・八センチの台紙に貼られ、帙に収められている。詞書が書かれた色紙の寸法は縦二三・九×横二〇・五センチ、絵を描いた色紙も縦二三・九×横二〇・八センチとほぼ同じである。なお書誌事項は末尾にも記す。

本作品は本学図書館の貴重書デジタルアーカイブで公開されているが、第四四帖（竹河の巻）から始まり第三〇帖（藤袴の巻）で終わり、物語の粗筋に沿った配列ではない。そこで本稿では巻の順番に並び替え、詞書をすべて翻刻して現代語訳を付け、また絵の解説も掲載する。竹河の巻の初めにある「44竹河（第1図。No.3）」①以下を用いて、凡例に代える。まず「44竹河」の44は巻の通し番号、竹河は巻名を示す。竹河と紅梅の巻

岩 坪 健

は中世と近世とで順序が違うが、ここでは新編日本古典文学全集（以下、新編全集と略称する）の順による。また竹河は竹川とも書くが、色紙に書かれた通りに翻刻する。なお巻名が書かれていない場合は、巻名（若菜下・匂宮）を補い「」で括弧する。続く（第1図。No.3）の第1図は現状の順番、No.3はアーカイブのコマ数を表わす。①以後は以下の通り。

一、①は詞書の翻刻で改行は／、読めない箇所は□で表す。読解の便宜を図り、①に該当する新編全集の本文を②に引用して、末尾の（）内に新編全集の冊数と頁数を書く。例えば（新編全集⑤七九頁）は第五冊の七九ページを示す。

一、①と②とで本文に異なる場合も、③には①の現代語訳を載せる。理解を助けるため、（）内に主語や説明などを補足する。

一、④は①の場面説明、⑤は絵の解説、⑥は補足説明。⑥には

詞書の内容と絵の場面が合わないこと（巻名を欠く二帖のほか、33藤裏葉・46椎本・50東屋の巻も疑いあり）などについて記す。

一、各巻の末尾に担当者名を（ ）内に記す。担当者（高山卓・芦野陽子・小林美美・中村梨恵子・浦野洋紀・丹羽雄一）は全員、本学大学院生であり、各人が提出したものに岩坪が全面的に加筆したので文責は岩坪にある。

一、アーカイブの配列と巻名は以下の通りである。3・44竹河は、アーカイブの3コマめが第四四帖（竹河の巻）であることを示す。

- 3・44竹河。4・49宿木。5・37横笛。6・33藤裏葉。
7・34若菜上。8・36柏木。9・38鈴虫。10・50東屋。
11・46椎本。12・51浮舟。13・29行幸。14・42匂宮。15・
43紅梅。16・32梅枝。17・39夕霧。18・48早蕨。19・41
幻。20・47総角。21・35若菜下。22・40御法。23・45橋
姫。24・31真木柱。25・30藤袴。

29みゆき（第11図。No.13）

①くらの人の左衛門のそを／御つかひにてきし一えた／たてまつらせ給

②蔵人の左衛門尉を御使にて、雉一枝奉らせたまふ。（新編全

集③二九三頁）

③（帝は）蔵人の左衛門尉をお使者にして、（源氏に）雉を付けた一枝を差し上げなさる。

④鷹狩に参加しなかつた源氏に、帝から雉が贈られた。

⑤室内にいて畳の上に座っているのが源氏、雉の付いた枝を捧げ持つのが勅使。

⑥一枝に雄は上、雌は下に付けられている。勅使から見て奥が雄で目の周囲が赤く羽根は無地で濃い茶色、手前が雌で羽根は薄茶色に焦げ茶色の斑点がある。

（小林美美）

30ふちはかま（第23図。No.25）

①らにの花のいとおもしろきを／も給へり／けるをみすのつまよりさしいれて／これも御覧すへきゆへはありけり／とてとみにもゆるさても給へれば／うつたへにおもひもよらてとりたまふ／御袖をひきうこしたり

②蘭の花のいとおもしろきを持たまへりけるを、御簾のつまよりにさし入れて、「これも御覧すへきゆゑはありけり」とてとみにもゆるさで持たまへれば、うつたへに思ひもよらで取りたまふ御袖を引き動かしたり。（新編全集③三三三頁）

③（夕霧は）蘭（藤袴）の花の大変趣のあるのをお持ちでいらつしやつたが、御簾の端からさし入れて、「これもご覧になつ

てしかるべき理由がありましたよ」とおっしゃって、すぐには手放さず持つていらっしやるが、(玉鬘がそれに) まったく気づかずにお取りになる、そのお袖を(夕霧は) 引いて動かした。

④夕霧が玉鬘のもとを訪れ、恋情を伝える。

⑤夕霧が簾の中で玉鬘の袖を捉え、胸中を訴えている。祖母大宮の喪に服しているため、鈍色の直衣姿である。庭には藤袴が咲いている。

⑥物語本文には喪中で「櫻巻きたまへる姿」(三二九頁)とあるが、絵では垂らしている。藤袴は蘭の異名で、秋の七草のひとつ。秋に薄紫色の花をつけ、紫はゆかりの色である。

(丹羽雄一)

31まきはしら(第22図。No.24)

①ひはたいろのかみのたゝ／いさゝかにかきはしらの／ひわれたるはさまに／かうかひのさきして／をしいれたまふ

②檜皮色の紙の重ね、ただいささかに書きて、柱の乾割れたるはさまに、筭の先して押し入れたまふ。(新編全集③三七三頁)

③檜皮色(黒みがかった紅色)の紙にほんの少し書き、柱のひび割れた隙間に筭の先で押し込めなされる。

④両親が離別して母親に引き取られることになった姫君が、今まで暮らしていた父の屋敷を去る前に別れの和歌を詠んで書いて

た紙を、愛着のある柱に泣く泣くさし入れる。手紙の紙とそれを結びつける草花は同じ色に揃えることが多いので、姫君は柱の色に近い檜皮色の紙を選んだ。

⑤姫君は右手に筭(髪をかき上げたり掻いたりする道具)を持つが、紙は柱と同色だから見え、写し崩れ(模写していく過程で抜け落ちること)かもしれない。そばにいたのは、和歌を詠み合った侍女の木工の君と中将のおもとであろう。

⑥姫君が詠んだ和歌「今はとて宿離れぬとも馴れきつる真木の柱はわれを忘るな」(今は限りと邸を離れても、馴れ親しんだ真木の柱は私を忘れないで)にある「真木柱」は本来、杉や檜で作られた太くて立派な柱をいうが、源氏絵ではその意識は希薄で他の柱と変わらない。

(丹羽雄一)

32梅かえ(第14図。No.16)

①ちんのはこにるりのつき／ふたつすへておほきに／まろかしつ、／いれたまへり

②沈の箱に、瑠璃の坏二つ据ゑて、大きにまろがしつ入れたまへり。(新編全集③四〇六頁)

③沈香木の箱に瑠璃の香壺を二つ据ゑて、(薫物を)大きく粒にまるめてお入れになっている。

④前斎院(朝顔の姫君)から源氏の元に送られた、薫物の様

子。

⑤よく描かれる場面であるが、他の作品では源氏が訪ねてきた兵部卿の宮と一緒に香壺を見ていて、二人とも直衣姿である。ところが本図では、白い直衣を着た源氏と向き合っているのは狩衣姿であり、この者は香壺と梅の枝に付けた手紙を届けに来た前斎院の使者であろうか。また兵部卿の宮が簀子に座ることはないので、源氏の従者が控えているのであろう。

⑥本図に描かれた三人の横顔には黒の縦線が見え、これは烏帽子の紐であろうか（45橋姫、参照）。本図と巻名を欠く二帖（35若菜下・42匂宮）とは、手紙と梅花が共通する。

（中村梨恵子）

33藤のうら葉（第4図。No.6）

①頭中将して御せうそこあり一日の／花のかけのたいめんあかすおほえ／侍しを御いとまあらは立より給／なむやとあり御文には／我宿の藤の色こき誰かれに／たつねやはこぬ春の名残を
②頭中将して御消息あり。「一日の花の蔭の対面の飽かずおほえはべりしを、御暇あらば立ち寄りたまひなんや」とあり。御文には、「わが宿の藤の色こきたそかれに尋ねやはこぬ春の名残り」を」（新編全集③四三四頁）

③（内大臣は子息の）頭中将を遣わし、（夕霧への）お手紙をお送りになられる。「先日の桜花の咲く木陰での対面では物足

りなく思われましたので、もしお時間がありましたら、ぜひお立ち寄りくださいますか」とある。お手紙には、「私の家の藤が色濃く映える今日の夕暮れ時に、春の名残を訪ねてきてくれないことがありますか」。

④夕霧は、内大臣からの招待の手紙を頭中将（柏木）より受け取る。

⑤本図が詞書の内容を絵画化したものならば、柏木が藤に結ばれた内大臣からの招待状を夕霧へ差し出している、と解釈できる。しかしながら物語本文で登場するのは夕霧と柏木のみで、本図に描かれた女性が誰であるか判じがたい。別の場面を探すと、夕霧から雲居の雁に届いた後朝きみぎらの文を父内大臣が見に来て、雲居の雁が困惑している箇所（四四二頁）であろうか。ただし、その手紙に藤の花が付いていた、とは書かれていない。
⑥藤裏葉の巻といえは、内大臣が宴にて夕霧と雲居の雁の結婚を許す場面を描くものが多く、本図の場面は珍しい。

（高山卓）

34若な 上（第5図。No.7）

①すこしおほきなるねこをひつ、きて／にはかにみすのつまよりはしり／出るに人々をひえさはきて／そよ／とみしろきさまよふ／けはひとをとなひみ、／かしかましきこ、ちす
②すこし大きな猫追ひつづきて、にはかに御簾のつまより走

り出づるに、人々おびえ騒ぎてそよそよと身じろきさまよふけはひども、衣きぬの音なひ、耳かしがましき心地す。(新編全集④一四〇頁)

③(とても小さくかわいらしい唐猫の後を)少し大きな猫が追いかけてきて、急に御簾の端から走って出てきたところ、女房たちが恐ろしく思い慌てふためいて、ざわざわと身動き惑う様子や音はうるさく感じられる。

④唐猫は中国伝来の貴重な猫なので、逃げ出さないよう首に綱が付けられている。その猫が大きい猫に追われ逃げようとして綱を引っ張るうちに、下ろしていた簾の端が引き開けられ、室内にいた女三の宮が庭で蹴鞠をしていた柏木に見られてしまう。

⑤物語では女三の宮が唐猫をつなぐ綱を握っている、とは書かれていないが、源氏絵ではこのように描くと決まっている。庭にいる貴公子たちのうち、女三の宮を垣間見ている赤色の狩衣姿が柏木、その様子を察した黄緑色の狩衣姿が夕霧であらうか。手前にいる三人の女房たちは蹴鞠に見入っていて、柏木の垣間見に気づいていない。

⑥本図はよく描かれた名場面であり、⑤で夕霧は黄緑色の狩衣姿と推測した。しかし物語では夕霧は「桜の直衣」を着用し、蹴鞠に興じる貴公子たちは冠を付けている、と書かれている。

それを受けて源氏絵でも夕霧・柏木たちは冠に桜の直衣姿に描かれることが多く、本図のような狩衣姿は従者の衣装になる。

(高山卓)

35「若菜下」(第19図。No.21)

①たれかまた／こゝろをしりて／住よしの／神代をへたる／□□□と、ふ／御たゝうかみに書給へり

②たれかまた心を知りて住吉の神世を経たる松にこと問ふ御畳紙に書きたまへり。(新編全集④一七二頁)

③(私とあなた以外の)いったい誰がまた(住吉詣の)真の理由を知っていて、住吉の神代から長い時を経た松に声をかけられるだろうか。

(源氏は)懐中の紙にお書きになった。

④明石の女御腹の皇子(源氏の孫)が東宮に立ち、源氏は明石一族が信仰していた住吉の神のご利益ゆえと思う。源氏たちは願ほごきに住吉に参り、明石の女御の実母と祖母が乗る車に、そつと和歌をしたためた畳紙を渡した。

⑤庭には紅梅と松、直衣姿の男君の手元には紅梅の枝に結ばれた手紙と硯箱がある。この柄の白い直衣は、源氏がよく着ている(第29 32 36 40 41帖)。

⑥詞書に記された住吉参詣は「十月なか中の十日」(一七一頁)であるが、絵に描かれた紅梅は咲いていて季節が合わず、詞書と

絵は一致しない。和歌では住吉の社といえは松がよく詠まれるので、松つながりで組み合わされたか。本図と42句宮の共通点として庭の梅、室内に座る直衣姿の男君、その前に置かれた結び文と硯箱のほか巻名の欠落、絵と詞書が齟齬する点も挙げられる。

(浦野洋紀)

36 柏木 (第6図。No.8)

① たか世にか／たねをまきしと／人とは、／いか、いはねの／松はこたへむ

② 誰が世にか種はまきしと人間はばいか岩根の松はこたへむ
(新編全集④三三五頁)

③ 誰がこの世に種を蒔いたのだろうと人が尋ねたら、岩根の松はなんと答えるでしょうか。

④ 源氏は女三の宮に、薫を見捨ててまで出家したことに對して嫌味な和歌を詠みかける。薫の父は源氏だと世間では思われているが実父は柏木で、和歌の「松」は薫を暗示する。

⑤ 薫が生まれて五十日になる祝いの日、源氏は出家した女三の宮のもとを訪れ、薫を抱き上げながら柏木や女三の宮に對する憎しみや哀れみの間で揺れ動き感慨にふける。女三の宮は几帳に挟まれ、源氏から顔を背けている。

⑥ 「誰が世にか」の和歌は祝宴が終わり女房たちが几帳などに

姿を隠した後、源氏と女三の宮、薫だけがいる部屋の中で詠まれたものである。本図は源氏の前に女房たちが控えているので、和歌が詠まれる少し前の場面、すなわち乳母たちを召し出して薫を抱きかかえた箇所(三三二頁)か。女三の宮は尼姿に見えないが、これは剃髪する僧侶が惜しんで短く切らなかつたから、また「鈍色」(濃いねずみ色)の衣を重ねた上に「黄がちなる今様色など」を着ているからである(三三二頁)。

(菅野陽子)

37 よこふえ (第3図。No.5)

① 横笛の／しらへはことに／かはらぬを／むなしくなりし／ねこそ／つきせね

② 横笛の調べはことにはあらぬをむなしくなりし音こそつきせね
(新編全集④三五七頁)

③ 横笛の調子は昔と特に変わらないので、今は亡き故人(柏木)の奏でた音色が絶えてしまうことなどないでしょう。

④ 夕霧(源氏の子息)が亡き親友(柏木)の正妻(落葉の宮)を見舞った際、柏木遺愛の品である横笛を贈られ詠んだ和歌。

⑤ 夕霧が柏木の遺品である横笛を試みに吹き鳴らし、隣室では一条御息所と落葉の宮の親子が琴を掻き鳴らしている。奥にいるのが落葉の宮。手前の尼削ぎ姿が母の一条御息所で、裳を着用しているのは皇女である娘に敬意を表するため。

⑥本図と同じ場面を採り上げた作品は他にもあるが、本図の描き方は独特である。物語本文によると琴の合奏は夕霧が訪れたとき、夕霧が横笛を吹くのは帰る間際に時間帯が異なる。本図で合奏と独奏が同時に描かれたのは異時同図法か、あるいは源氏絵ではこのような構図が継承されていたのであろうか。

(高山卓)

38 鈴むし (第7図。No.9)

①きんの御ことめして／めつらしくひき給／宮御す、ひきをこたり／給て御ことに猶こゝろ／いれたまふ

②琴の御琴召して、めづらしく弾きたまふ。宮の御数珠引き怠りたまひて、御琴になほ心入れたまへり。(新編全集④三八二頁)

③(源氏は)琴のお琴を取り寄せなさり、すばらしくお弾きになる。女三の宮はお数珠を繰ることをお忘れになり、(出家した今も)お琴の音色にやはり夢中でいらつしゃっている。

④中秋の名月の夕暮れ、源氏は女三の宮のもとを訪れ琴の演奏する。その琴は源氏物語では限られた貴人しか演奏しない特別な楽器であり、かつて源氏が女三の宮に手ほどきしていた思い出深いものである。

⑤女三の宮は尼削ぎで、室内も仏画が飾られ花が供えられている。

⑥当場面は源氏絵に多く見られ、36 柏木の絵も源氏が女三の宮の部屋にいる。しかし本図が女三の宮の姿も部屋のしつらいも出家人らしいのに対して、36 柏木は俗人のように見える点異なる。

(荇野陽子)

39 夕きり (第15図。No.17)

①鹿のいといたうなくを／我おとらめやとて／里遠みをの、しのはら／分て来て／われもしかこそ／こゑもおしまね

②鹿のいといたうなくを、「我おとらめや」とて、

里遠み小野の篠原わけて来てわれもしかこそ声も惜しまね (新編全集④四五一頁)

③男鹿がたいそう甚だしく鳴くので、「女鹿を恋う想いに)私も劣るだろうか」とおつしゃって(お詠みになる)。

人里遠く小野の篠原を分けて来て、私も鹿と同じようにこのように声も惜しまず泣いています。

④小野にある山莊を訪ねた夕霧は侍女の少将の君に、落葉の宮への想いを伝える。

⑤当巻の名場面、夕霧は簀子に立って秋の夕日に扇をかざし、田んぼには鹿が鳴き、滝が流れてと物語の通りに描かれている。室内にいるのは少将の君であろう。

⑥少将の君は物語本文によると、「鈍色の几帳を簾のつまより

すこし押し出でて、裾をひきそばめつつあり。」(四四九頁)とあるが、本図には几帳も簾も見当たらず、その姿は露わに描かれている。また少将の君の衣装について本文では、「衣の色いと濃くて、椽の喪衣一襲、小桂着たり。」(四四九頁)とあり、本図では赤い小桂の下に椽色(濃いねずみ色)の衣が見える。牡鹿が牝鹿を恋い慕い高らかに鳴く様が描かれ、夕霧もまた落葉の宮への想いを詠む。寄り添うつがいの鹿とは逆に、落葉の宮は亡夫の親友である夕霧になかなか心を開くことがない。

(中村梨恵子)

40御のり(第20図。No.22)

- ①院はいとかきりなしとみたてまつり／給てた、大かたの御しつらひ／なにかのことはかりをなんいとなませ／給けるかく人まひ人などの／ことは大将の君より／わきてつかふまつり給
- ②院はいと限りなしと見たてまつりたまひて、ただおほかたの御しつらひ、何かのことはかりをなん當ませたまひける。楽人、舞人などのことは、大将の君、とりわきて仕うまつりたまふ。(新編全集④四九五頁)
- ③院(源氏)は(紫の上の用意を)この上ないと拝見なされて、ただ大体の設えや何かのことぐらいをお世話なされた。楽人や舞人などのことは、大将の君(夕霧)から弁えてお世話さ

れる。

④三月十日、紫の上発願の法華経千部が二条邸で供養される。死期を悟っていた紫の上は、何を見てもこれが見納めと感慨にふけた。

⑤花盛りの折、一晚中、読経や楽器の音が響く中、夜明け方になり蘭陵王の舞も終りに近づき佳境を迎えるところを描いた、当巻を代表する名場面。大勢の人々が参集したが、源氏絵では源氏と紫の上だけ、または本図のように二人の女房を付け添える程度である。女房の一人は背を向け、その表情は窺えないが、うつむいた姿には悲哀感が漂う。また、紫の上もうなだれているように見える。一方、源氏が紫の上の方を向いたまま、顔だけ動かして舞を見ているのは、紫の上への思いの表れであろう。蘭陵王の特徴的な仮面や衣装は、細かく描かれている。

⑥詞書と絵とは同じ催しを扱ってはいても、時間帯は異なる。詞書は法会の準備、絵は行事が終わる頃で、このくい違いは莊厳で華麗な催しとその主催者である紫の上の悲哀との対比、あるいは並んで座についても紫の上の心労とそれに気づけない源氏との心理的距離を物語っているのだから。図の左下を横切る斜線と、それと直角に交差する高欄の構図は35若菜下と同じで、庭を見る男君も両図とも白い直衣に紺の指貫である。

41まほろし(第17図。No.19)

①導師のまかつるをおまへに／めしてさかつきなとつねの／さほうよりもさしわかせ／ことにろくなど／給はず

②導師のまかづるを御前に召して、盃など常の作法よりも、さし分けたまひて、ことに禄など賜す。(新編全集④五四八頁)

③導師が退出するのを(源氏は)御前にお呼びになって、お盃を賜うなどもいつものしきたりよりも特別に丁寧にして、格別に禄などをお与えになる。

④年末の御仏名(その年の罪障を懺悔する法会)の導師を、源氏はこの法会を催すのもこれが最後だと思い、例年よりも丁寧にねぎらう。

⑤本図の左上、僧衣を着て左手に盃を持っているのが導師、右側の白い直衣姿が源氏であろう。二人の前には盃を載せた三方、赤い衣を着た男の前には酒を注ぐ長柄の銚子が置かれている。図の左下にいる人物は、大勢の参列者の一部であろう。

⑥紫の上を失い、源氏がいよいよ出家の決意を固め準備を進める中、源氏主催の御仏名が開かれ、これを最後に源氏は物語から退場する。源氏のもとを人々が訪れた久々の賑わいとは裏腹に、源氏の孤独が際立つ。

(中村梨恵子)

①おまへちかき梅の／いといたくほころひたる／匂ひのさと打散わたれる／にれいの中將の御かほり／いと、しくもてはや／されていひしられず

②御前近き梅のいといたくほころびこぼれたる匂ひのさとうち散りわたれるに、例の、中將の御薫りのいとどしくもてはやされて、いひ知らずなまめかし。(新編全集⑤三四頁)

③お部屋に近い梅のたいそう美しく咲きはころびた花の匂いが、さつとあたりに広がると、例によって中將(薫の君)の御薫りがいっそう引き立って、何とも言えないほどである。

④源氏が生前に建てた六条院で宴会が開かれ、薫の君も招待された。

⑤男君の前には硯箱と手紙が置かれ、その前には二人の男が座している。

⑥詞書は梅薫る下での宴を描写するが、絵に盃などは見られず酒宴の場面とは考えにくく、詞書と絵は一致しない。本図は「白き御衣どもを着」た源氏が「白き紙」に和歌を書き「梅につけ」て女三の宮に送った箇所(若菜上の巻、新編全集④七一頁)か。その作例は浄土寺本扇面にあるが、浄土寺本は物語本文に合わせて源氏は「花をまさぐり」、庭には「鶯の若やかに、近き紅梅の末にうち鳴きたる」を描く。本図は白梅で鶯はい

ず、男君は何も手にしていない。本図の構図は35若菜下に似るが、それも詞書に巻名がなく絵の場面は特定しがたい。29行幸の絵は白い直衣姿の源氏に黄緑色の狩衣を着た勅使が雉を捧げ、赤い狩衣姿が簀子に控え、その三人の配置も衣の色も本図に似る。

(小林美美)

43紅梅(第13図。No.15)

- ①おまへの花心はへありてみゆめり／兵部卿宮内に／おはすなり一えたおりて／まいれし人そ／しるとて
- ②「御前の花、心ばへありて見ゆめり。兵部卿宮内裏におはすなり。一枝折りてまゐれ。知る人ぞ知る」とて(新編全集⑤四七頁)
- ③(大納言は)「お庭の花は風情があるように見える。兵部卿宮は宮中にいらつしやるそうだ。一枝折って差し上げよ。『知る人ぞ知る』というもの」と言つて
- ④大納言が子息の若君に、「一枝の紅梅を宮中にいる匂宮に届けるように」と言う。
- ⑤物語本文では大納言が「花折らせて」(四八頁)とあるが、絵では大納言自ら紅梅の枝を握って折り取るかのように見える。
- ⑥若君は殿上童で、まだ元服していない。絵に描かれた少年は

刀を差しているが、源氏絵に登場する貴族の子供は刀を持たない。ことによると若君ではなく、貴人に従う童であろうか。本図は紅梅、前巻の図は白梅が話題になっている。

(小林美美)

44竹河(第1図。No.3)

- ①さくらをかけ物にて／三はんにかすひとつかち／給／はんかたに花を／よせてと／たはふれかはし／きこえ給
- ②桜を賭け物にて、「三番に数一つ勝ちたまはむ方に花を寄せてん」と戯れかはしきこえたまふ。(新編全集⑤七九頁)
- ③桜を賭け物にして、「(囲碁の)三番勝負で、二番勝たれた方に花を譲つて」と、冗談を申し交していらつしやる。
- ④二人の姉妹が、庭の桜を賭け物にして碁を打つ。
- ⑤室内にて碁を打つ二人の姫君を、蔵人少将が垣間見ている。彼は姉君に求婚していたが、姉妹の母君(玉鬘)は取り合わなかった。桜は満開で、その様は和歌で見立てられた白雲のようである。
- ⑥古くは国宝源氏物語絵巻にも描かれた、当巻を代表する名場面である。物語本文には「廊の戸の開きたるに、やをら寄りのぞきけり。」(渡り廊下の戸が開いているので、少将はそっと近寄つてのぞいた。)とあるが、本図では巻き上げられた御簾の隙間から見ている。国宝源氏物語絵巻も簾越しで、本文とは

異なる描き方が継承されていたのかもしれない。基石を入れた器は碁盤の上にあるので、勝負を始める前か後であろう。

(岩坪健)

45橋ひめ(第21図。No.23)

①有明の月のまた夜ふかくさし／出るほどに出たちていと忍びて／御ともに人などもなくてやつれ／おはしけり河のこなたなれば／舟などもわづらはて／御馬にてなりけり

②有明の月のまだ夜深くさし出づるほどに出で立ちて、いと忍びて、御供に人などもなく、やつれておはしけり。川のこなたなれば、舟などもわづらはで、御馬にてなりけり。(新編全集

⑤一三五頁)

③(薫は)有明の月が、まだ夜が深く、さし上る頃に出立して、たいそうお忍びで、お供に人などもほとんどなくて、身をやつしていらっしやった。(行き先の八の宮邸は)宇治川のこちら岸なので、舟などの面倒もなく、御馬で(行かれるので)あった。

④薫は宇治に住む八の宮から法話を聞くため、以前から通っていたが、牛車では目立つため馬で行く。

⑤右上には酸化して黒ずんでいるが銀泥で描かれた有明の月、その下には宇治川にかかる宇治橋が見える。中央には騎乗した薫、先頭を行く牛飼い童、傘袋に入れた大傘を持つ供の者たち

がいる。手前の垣根のそばにある花樹は花の色や形状、葉の様子などから椿か山茶花かと思われ、「秋の末つ方」(晩秋)を考慮すると山茶花であろう。

⑥三人の従者の烏帽子には赤い紐が付いて、顎の下で結んでいる。これは後世のかぶり方で、平安時代の烏帽子には紐はなく、代わりに簪で留める。

(浦野洋紀)

46しゐかもと(第9図。No.11)

①秋のけしきを音羽の山／ちかく風のをともいとひや、かに／まきの山辺もわづかにいろ／つきてなをたつねたるに／おかしうめつらしうおほゆ

②秋のけしきを、音羽の山近く、風の音もいと冷やかに、槇の山辺もわづかに色づきて、なほ、たづね來たるに、をかしうめづらしうおほゆるを(新編全集⑤一七八頁)

③秋の気配を、音羽の山の近くでは風の音もとても冷ややかで、槇の山のほとりもわずかに紅葉して、やはり(宇治まで)訪れると、趣深く素晴らしく感じる。

④久方ぶりに宇治に來た薫は、まだ都には訪れていない秋の気配を感じる。

⑤都より一足先に秋が訪れた宇治の景色は、紅葉と青々とした山とで表現されている。その間にいる薫はまさに夏と秋の境

目、都と宇治の境界にいるかのように見える。

⑥建物の造り―長い廊下、張り出した舞台―は、当巻や玉鬘の巻などで描かれる長谷寺に似るので、ことによると別の場面の図を転用したのかもしれない。

(菅野陽子)

47あけまき (第18図。No.20)

①紅葉をふきたる舟の／かさりの錦とみゆるに／こゑ／吹出るもの、ねとも／風につきておとろ／しき／まておほゆ

②紅葉を葺きたる舟の飾りの錦と見ゆるに、声々吹き出づる物の音ども、風につきておどろおどろしきまでおほゆ。(新編全集⑤二九三頁)

③紅葉を屋根に葺いている舟の裝飾が、錦のように見えて、声々に吹き奏でる楽器の音が風に乗って響くのが、仰々しいほどに思われる。

④薫に勧められて、匂宮は紅葉狩りを口実に宇治へ行き、宇治川に舟を浮かべる。目的は宇治にいる姫君をひそかに訪れることだが、付き従う者たちは楽器を奏でるなど楽しげで、匂宮の本意に気づいていない。

⑤本図は詞書の本文を忠実に絵画化しており、この図様は江戸時代になると定着する。

⑥物語本文には川に浮かぶ舟を女房たちが邸宅内から見るとあ

り、本図は女房たちが見た光景を描いている。舟の中で向かって右から二人めは、笙を吹いている。二人だけ烏帽子ではなく冠をかぶり、正装の黒い袍を着ているのが薫、平常服の直衣姿が匂宮であろう。

(浦野洋紀)

48さわらひ (第16図。No.18)

①君にとて／あまたの春を／つみしかは／つねをわすれぬ／つわらひ／なり

②君にとてあまたの春をつみしかば常を忘れぬ初蕨なり(新編全集⑤三四六頁)

③亡き八の宮にと幾度も春に摘んで参りましたから、その習わしを忘れずにお届けする初蕨でございます。

④父の八の宮に続き姉の大君にも先立たれ嘆き悲しむ中の君の元に、阿闍梨から早蕨と和歌(詞書本文)をしたためた手紙が届く。

⑤本図の左上に阿闍梨が遣わした使者がいる。貴女は几帳のそばに多いことが多く、右端に多いのが中の君であろう。その前には阿闍梨から送られた蕨が、風流な籠に入れてある。籠の個数は物語には記されていないが、蕨と土筆つっくしが贈られたとあるから本図のように二つ描かれることが多い。

⑥本図で中の君とそばにいる女房は喪に服して墨色の衣を着て

いるが、もう一人の上着は赤い。これは当時、亡き人との関係（縁故など）が薄いと喪服の色も薄かったから、あるいは江戸時代になると源氏絵は婚礼調度の一つになり華やかさが好まれたからかもしれない。

（中村梨恵子）

49やとり木（第2図。No.4）

①三はんに数ひとつまけさせ給ぬ／ねたきわさかなとてまつけふは／この花一えたゆるすとのたまは／すれは御いらへきこえさせて／おりておもしろきえたを／お□□□□り給ふ

②三番に数一つ負けさせたまひぬ。「ねたきわさかな」とて、「まづ、今日は、この花一枝ゆるす」とのたまはすれば、御答へ聞こえさせで、下りておもしろき枝を折りて参りたまへり。

（新編全集⑤三七八頁）

③（帝と薫が三番碁を打ち）帝は三番の対局のうち一番お負け越しになられた。帝が「悔しいことであるよ」とおっしゃって、「ひとまずのところ、今日はこの花（菊）一枝を（賭け物として取ることを）許そう」と仰せられるので、（薫は）ご返事を申し上げずに庭へ下りて趣ある枝を折り、（帝の御前に）参りなさる。

④帝が薫との三番碁に負け（帝の一勝二敗）、薫に賭け物として菊を一枝採ることを許す。それは帝の娘（女二の宮）と薫と

の結婚を許可することを暗示する。

⑤対局の後、負けた帝は纏縷縁の畳に座り、勝った薫は菊を折りて庭へ下りている。

⑥本図は宿木の巻でよく描かれた場面である。ちなみに44竹河の絵とは碁石を入れた二つの器を碁盤の上に並べて置くことや賭け物が植物（桜・菊）であることのほか、結婚に関わる場面であることも共通する。詞書も44竹河は「三番に数一つ勝ち」、本図は「三番に数一つ負け」と似る。

（高山卓）

50あつまや（第8図。No.10）

①宮うちよりまかてたまふ／わか君おほつかなくおほえ／給ければしのひたるさま□□も／れみならておはしますにさしあひて／をしと、めたてたれはらうに／御車よせておりたまふ

②宮、内裏よりまかてたまふ。若君おほつかなくおほえたまひければ、忍びたるさまにて、車なども例ならておはしますに、さしあひて、押しとどめて立てたれば、廊に御車寄せて下りたまふ。（新編全集⑥五七頁）

③匂宮が宮中から退出なされる。若君（匂宮の子）を気がかりにお思ひになったので、人目を避ける様なども、いつもとは違っていらつしゃるところに、（中将の君の牛車と）ぱったり出会って、（中将の君が車を）引き留めて立ち止まっているので、

(匂宮は) 渡り廊下にお車を寄せて降りられる。

④中の君に娘の浮舟を託して帰ろうとした中将の君は、宮中を退出した匂宮と遭遇する。匂宮は中の君が半年前に産んだ男宮を早く見たくて、人目に立たないように帰宅したため、中将の君と出会った。

⑤車から降りた匂宮は二条院に入り、中の君に中将の君について尋ねている。

⑥当場面はあまり絵画化されておらず、珍しい例である。物語の上では匂宮が浮舟を偶然見つけて言い寄る直前であり、薫と匂宮、浮舟の物語が動き出す重要な場面と言える。もともと絵の構図は同じ東屋の巻で国宝源氏物語絵巻にも見られる、薫が浮舟の隠れ家で一夜を語らう場面(九〇頁)に似る。舞台が二条院(源氏が住んでいた屋敷)ならば屋根は檜皮葺^{ひわだがき}で、本作品では例えば40御法のように茶色で塗られ、端は黒線で縁取られる。一方、本図の屋根は板葺きのように邸宅には見えず、浮舟がいる三条の小家の方がふさわしい。

(芦野陽子)

51浮舟(第10図。No.12)

①たちはなの／小島は／色も／かはらしを／このうきふねそ／行系しら／れぬ

②橘の小島の色はかはらじをこのうき舟ぞゆくへ知られぬ(新

編全集⑥一五一頁)

③橘の小島は色も変わることはないけれど、浮舟のような私の身はどこを行き来するのでしょうか。

④小舟の上で、浮舟が匂宮に返した和歌。橘は常緑樹で、葉の色は変わらない。

⑤雪が降り積もった夜明けに、匂宮が浮舟を小舟に乗せて宇治川を渡る途中、中洲にある橘の小島を見て、常緑樹のように不變の愛を誓う歌を詠む。

⑥本図はしばしば描かれる場面だが、匂宮の姿が独特である。浮舟と向かい合うことが多いが、本図は橘の木の方を向いて指さし、首だけ回して浮舟を見ているかのようである。船頭と付き添いの女房などを物陰に隠して描かず、主役の二人に限る構図はよく見かける。

(小林美美)

詞書と絵の色紙を貼り付けた台紙は新しいので、もともとは画帖か屏風で、後代になって残存するものを現行のように装丁したと推定される。たとえば上下二冊の画帖の場合、一冊に源氏物語五四帖を半分ずつ収めることが多く、下冊は第二八〜五四帖からなる。第二九帖から第五一帖まで現存する本作品は、下冊の巻頭一帖と巻末三帖が欠落したと考えられる。

詞書の筆者は巻名を欠く二帖(35若菜下・42匂宮)も含め、

同一人物で近世中期頃の写しと見られる。絵については、例えば白い直衣に紺色の指貫姿が頻出するので（29行幸・32梅枝・34若菜上・35若菜下・36柏木・40御法・41幻・42匂宮・43紅梅・44竹河・51浮舟）、同じ工房で制作されたと推測される。

詞書を記した色紙には金銀泥で草花などが描かれ、その下絵は二三枚すべて異なり、連続する図柄もない。ということとは、大きな料紙に花などを描いてから色紙の大きさに切断したのではなく、最初から現状の大きさの色紙に一枚ずつ描いたのであろう。

下絵の中には詞書や絵の内容と共通するものが散見され、整理すると次のようになる。なお便宜上、詞書の色紙に描かれたのは詞書絵、物語の一場面を色紙に描いたのは物語絵と仮称する。

○巻名の植物が詞書にも書かれ、詞書絵にも物語絵にも描かれている。30藤袴・33藤裏葉・43紅梅。

○詞書に記された植物が、詞書絵にも物語絵にも見られる。42匂宮・44竹河。

○詞書絵にも物語絵にも同じ事物（波）が見られる。47総角。

○巻名に含まれる事物（橋）が、詞書絵にも物語絵にもある。45橋姫。

○巻名に含まれる事物（舟）が詞書に記され、詞書絵にも物語

絵にもある。51浮舟。

そのほか巻名・詞書・物語絵と直接の関係はないが、40御法・51浮舟の詞書絵に選ばれた干し網に注目したい。一七世紀に制作された筆者不詳の「網干図屏風」（東京国立博物館蔵）にはその名の通り干し網が描かれ、文化遺産オンラインの解説によると、「干し網によって、静寂が漂う漁村の風情があらわされている。古来、帰路につく船や魚網は、貴族社会のなかで流行した隠遁思想によって、強い憧憬がもたれたものとされる。」とある。御法の巻では出家を希求しても光源氏の許可が下りず亡くなった紫の上、浮舟の巻では三角関係に悩み入水を決意した浮舟が登場する。この二人の厭世観を網干は暗示しているのかもしれない。久松由美子氏「御物海北友松筆網干図屏風―瀟湘八景からの独立とその時代性―」（『美術史』一一三三号、昭和六三年一月）参照。

（岩坪健）

「付記」本稿は、「知識発見型データベース作成アプリの開発と日本伝統文化の分野横断的研究」（同志社大学人文科学研究所第20期研究会第3研究（二〇一九～二〇二二年度）、および「近世から近代に至る日本伝統文化の分野横断的研究とデータサイエンス教材への活用」（科学研究費助成事業基盤研究（C）課題番号20K12565、二〇二〇～二〇二三年度）における研究の一部である。